

寺山修司演劇の再演に関する研究
—アダプテーションの視座から—
(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期 人文学専攻
学生番号：D196291
氏名：矢吹文乃

本論文は、寺山修司による演劇作品の没後の再演に着目し、アダプテーション研究の視座から再演研究の方法と意義を探るものである。

アダプテーション (adaptation) とは「適応」を意味する英語である。生物学では生物が進化して環境へ適応することを表すときに用いられる語であるが、文学研究では敷衍されて、ある作品が改作されて別の作品に生まれ変わることを指す語になっている。作品はアダプテーションされることで、作品は〈死後の生〉を獲得する。新たな環境にすぐれて適応した作品は《ただ生存するだけでなく、繁栄もするのである》¹。

アダプテーションによって作品が延命するという発想は、「オリジナルはコピーに勝る」という序列を解体する。コピーによってオリジナルはオリジナルたらしめられ、コピーもまたコピーにとってのオリジナルとなるのである。また、制作者の視点から見れば、過去の作品を解釈し再創造するアダプテーションの営みは一種の批評であるとも言える。

アダプテーションの観点に立って見つめたとき、演劇の最も特徴的な点の一つの原作(戯曲)に対してほとんど無数と言ってよいアダプテーション(上演)が制作されるという点である。ところが、演劇研究史を紐解いてみると、演劇研究は長らく戯曲偏重、初演偏重でおこなわれ、上演/再演は二次的なものとみなされてきたことがわかる。

だが、過去に書かれた演劇作品を観劇しようと考えるときに、我々がアクセスできるのは基本的には録画、それがなければ再演である。再演によって、作品は初演時のコンテクストから解放され、新しい時代/社会のコンテクストに接続される。どのような再演が作られているかを分析してゆけば、再演の制作者や受容者が生きている時代/社会の輪郭を捉えることができる。再演の資料的価値は、戯曲の強度を示す試金石として、あるいは作品の価値を裏づけている時代/社会のミニチュア標本として認めることができるのである。

そこで、本論文ではアダプテーションの視座から再演を問い直すために、寺山修司による演劇作品の没後の再演を研究することとした。

寺山修司は1935年12月10日に青森県弘前市に生まれた。1967年に東由多加の勧めで劇団「演劇実験室◎天井桟敷」を設立すると、劇作家としての頭角を現した。寺山の創作手法の特徴は、既存の作品を繰り返し引用・模倣することで元の文脈から〈ずらし〉ていく点にある。

このように考えたとき、後世の人々の再演によって寺山演劇の文脈が〈ずら〉されることは、寺山のクリエイティビティが継承されていることの証であると言える。しかし、従来の再演の評価では、「演劇実験室◎天井桟敷」の再現としての役割が強く求められてきた。こうした要請は、多様な解釈に基づく再演の制作を失速させ、寺山作品の今日的な文脈で見直すことを妨げてしまいかねない。

以上のような問題意識から、本論文では寺山の演劇作品が秘めている豊饒な再演/アダプテーションの可能性を探ることとした。そのために、寺山演劇の再演作品について、①戯曲が上演にどのように適応しているか、②上演が戯曲をどのように読みかえているか、③どのような上演のバリエーション(再演)が作られているか、④先行する上演と再演を比較し

たとき、先行する上演または戯曲がどのように読みかえられるか、という4つの問題を検討した。そして、これらの検討をとおして、上演／再演が戯曲／初演に対して発揮している批評性を評価することを目指した。

第Ⅰ部「アダプテーションと倫理」では、再演／アダプテーションがおこなわれる際に作品が適応する環境、すなわち制作者と受容者をとりまく時代／社会について論じた。第Ⅱ部で再演作品を分析・評価するための論点と評価軸を整理するのが第Ⅰ部の目的であった。

第1章「市街劇の犯罪性」では、寺山が考案した「市街劇」という演劇形態について考察した。寺山は二冊の演劇論集『迷路と死海——わが演劇』と『臓器交換序説』で市街劇の理念を語っている。しかし、記述を詳細に分析するとその理念には矛盾があり、論理の空隙を寺山自身も認めていたことがわかる。だが、ここで指摘する理念の矛盾は、作者の不在によって解消される性質のものである。言い換えれば、寺山没後の再演では理念を十全に体現した市街劇が上演されている可能性があるのだ。以上の考証から、再演やアダプテーションを研究することの意義を改めて示した。

第2章「市街劇の生存戦略」では、第1章で明らかにした理念の矛盾が、没後の再演とアダプテーションによって解消されたか否かを見ていった。元・天井棧敷関係者による「人力飛行機ソロモン」の再演と、カオス*ラウンジが制作した連作市街劇について論じ、市街劇が現代日本社会においていかに受容されているかを分析した。分析の際には中森明夫による小説『TRY 48』を補助線として用い、『TRY 48』におけるパロディとしての市街劇表象から、寺山演劇が現代において直面している新たな課題を指摘した。

第3章「アダプテーションと〈正統〉の記号」では、広く寺山作品に対して環境が要請しているものを炙り出すために、一旦演劇から離れて小説「あゝ、荒野」のアダプテーションを分析した。同小説のアダプテーションには写真家・森山大道が何度も作品を提供しているのであるが、森山の写真が小説に対して占める重要度はアダプテーションが繰り返されるたびに高まり、近年ではキービジュアル化している。結論では、特定の記号によってアダプテーションの〈正統〉性が担保されてしまう構造の権威性を考察した。

第4章「アダプテーションと〈文化の盗用〉」でも、第3章と同様に時代／社会の要請を検討した。本章では、映画『草迷宮』のアダプテーションをめぐってSNS上で展開された〈文化の盗用〉の議論を取りあげた。〈文化の盗用〉はある文化圏に属する者が他の文化圏の文化財を流用することを意味する語であるが、その構造は、作品を元のコンテキストから別のコンテキストへ置き換えて再創造・再解釈するアダプテーションに似ている。そこで、原作を持つ作品を作ることはアダプテーションなのか、それとも〈文化の盗用〉なのかを問い、2つの概念の線引きを試みた。

第Ⅱ部「再演を問い直す」では、寺山没後の再演を分析した。分析対象は、寺山演劇の再演のなかでも特に重要度が高いものに絞った。中心に取りあげたのは、最も広く知られる再演として数えられている蜷川幸雄演出による「身毒丸」の再演と、定期的な大規模な興行をおこなっているPARCO劇場での再演である。

第5章「〈病い〉を読みかえる」では、寺山の戯曲「説教節の主題による見世物オペラ 身毒丸」と、同戯曲を岸田理生がリライトした「身毒丸」を比較した。両戯曲における〈癩病〉をめぐる〈病い〉の表象に注目して、リライト時におこなわれた差別的表現の修正とその限界を指摘し、第九章での上演分析への展望を示した。

第6章「クリアな身体が挑発する」では、リライト版「身毒丸」の上演を分析し、リライトでは払拭しきれなかった差別的表現が上演で解体されているかを問うた。そして、リライト版「身毒丸」の戯曲と、蜷川幸雄の演出によって創りあげられた「身毒丸」の〈死後の生〉についての考察から、現代における寺山演劇の価値をはかった。

第7章「歴史のロマン、ロマンスの革命」では、「中国の不思議な役人」の2種類の再演を扱った。「中国の不思議な役人」の初演はPARCO劇場（旧西武劇場）でおこなわれ、寺山もそのことを意識して積極的に“商業演劇”を目指したようである。戯曲には〈中国〉に対する寺山のオリエンタリズムが反映されており、作中の歴史観や国家観は今日では肯定できない部分も多い。戯曲が抱えるこうした問題が再演においていかに読みかえられるかを、PARCO、および劇団「池の下」による再演の比較を通して見ていった。

第8章「毛皮纏う記号の肉体」では、最多再演回数を誇る「毛皮のマリー」を論じた。「毛皮のマリー」は1967年に美輪（丸山）明宏主演で初演されて以来、美輪のライフワークとして近年まで再演され続けている。初演の俳優が再演を繰り返すことによって、観客は「美輪でなければマリーではない」という印象を持ちはじめている。第3章で確認したような〈正統〉化が美輪の肉体を記号として生じているのである。分析では、美輪によるPARCO劇場での上演を、他の上演主体による再演と比較することで、俳優の身体性が戯曲を読みかえる可能性を探った。

本論文によって、寺山演劇の再演／アダプテーションが生んだ初演／原作からの〈ずれ〉の方向と程度が明らかになった。寺山演劇のなかでも特に有名である市街劇や「身毒丸」「毛皮のマリー」、まだまだ考察の余地がある「中国の不思議な役人」、さらには映画『草迷宮』と小説『あゝ、荒野』について、そこでおこなわれた〈ずらし〉を評価し、寺山作品の解釈可能性や今日的な価値の一端を示した意義は深い。また、分析／考察の過程では、アダプテーション理論それ自体の見直しと発展もおこなえた。

注

- 1 リンダ・ハッチオン（片渕悦久他訳）『アダプテーションの理論』晃洋書房、2012年4月、p.40